



公益財団法人長野県長寿社会開発センター

昨年度はシニアの社会参加をテーマに県内各地でタウンミーティングが開催されました。木曾会場ではワールドカフェスタイルで地元の様々なグループと交流し賑やかな意見交換が広がりました。（3月20日長野県木曾合同庁舎）

オープンデッキに広がる夢（諏訪市）

とある住宅街。通りから少し入ると民家の一室を改装したカフェがあります。見慣れた玄関を入ると茶葉を焙じた香が出迎えてくれました。案内された客室には、陽の光があふれるオープンデッキテラスが窓ガラスの向こうに広がり、その先の庭木の枝には、小鳥が次々と飛んできては、羽ばたいています。いつか体が鈍くなってきたのために、と室内をバリアフリーに改装して、オープンデッキを庭先にしつらえた。すると、訪れた友人がここでお茶を飲みたい、と言ったのがそもそもの始まりとのことでした。



出てくる料理はどれもひと手間かけて、おいしい工夫がいっぱいでした。おすすめのおやきは以前からずっと趣味で作っていたもの。オーナーの女性は「好きでやってきたことが無駄ではなかったと実感しています」と、お料理を出しながら話してくれました。

デザートのカキは娘さん、そして、コーヒーは旦那さんがご担当。コーヒーポットを手に「いらっしやいませ」と姿を見せると、手際よく豆を挽いて、丁寧にお湯をドリッパーへ注いで、「どうかな？」と最後のテイスティングは奥さんの役目です。

調度品の数々は、スプーンのひとつまで、時間をかけて集めてきたもの。お客の数を増やさないのは、無理をせずに自分のペースで楽しんでいるから。ご本人すら「まさかこういう展開になるとは思ってもみなかった」という奥さんは、それでも「好きだから続けられる」と話します。「続けられるうちは・・・」と、ひと品、ひと品、にこやかにご馳走していただきました。庭の枝垂桜が咲くころには、小鳥たちで賑やかなオープンデッキになるはずですよ。

ワンコインサロン（上田市）

千曲川の西岸、正面に太郎山を望む傾斜地に造成された住宅地の一角に「ふれあいワンコインサロン」の看板が見えます。日中ともなれば人の気配すらない団地の中で、玄関先に設えた“ふれあい地蔵”の奥から賑やかな声が漏れてきます。かつてレストランだった空き店舗を高齢者が集うサロンに提供している竹内さんは、「人と関わるのが生きる証」と話す。

市の福祉推進員になった数年前、参加した研修会で、何をすればいいかと質問したところ、民生委員は家の中、福祉推進員は（家にこもらないように）玄関から外へ連れ出すのが仕事、と講師からアドバイスを頂いた。高齢者の居場

所はたくさんあった方がいい。そこからサロンの立ち上げが始まった。

午前10時。ぞくぞくと集まってきた地元の方でとたんにサロンは笑い声でいっぱいになった。“ワンコイン”の看板通り、訪れた方から500円を頂戴するのは気兼ねなく利用してほしいことへの配慮。「損得じゃなくて、ボランティアの精神です」と竹内さん。女性たちに中に男性の姿も見える。当初は入りずらかったとのことだが、今では年に一度みんなで出かける旅行の際には“添乗員”役をかって出るのだという。

昭和40年代の造成当時は働き盛りの家庭に多くの子どもで賑わった新興住宅地も、およそ半世紀を経過して数百世帯の団地には多くの高齢者が暮らす一方、子どもの数は両手をわずかに超えるほどだという。同地区の自治会長も務める竹内さんは「朝日ヶ丘お助け隊」を結成して地域のちょっとした暮らしの問題に取り組み、傾斜地の住宅地ゆえに孤立しがちな高齢者のために地元のスーパーへ移動販売車の利用を依頼した。「それだけ切羽詰まった状況だった」とのことだが、それでもまだ80歳代は少ない。高齢化の本番はこれからなのだという。



サロンのテーブルを囲んで話は尽きません。竿竹屋のスピーカーが遠くを流れていきます。「この前の料理どうだった?」「肉じゃが、おいしかった!」「私が牛スジで作ったんだよ」「肉じゃが、ナンバーワン!」

みんなと話すのが本当の幸せ、という竹内さんの言葉が印象に残りました。

時を刻む想い（長野市）

路 肩の雪を踏み越えながら店内に入ると、日差ししの明るい室内に赤と白の椅子が並べられていました。かまど炊きのごはんでつくるおにぎりや地元で打ったうどんがご馳走の『かまどカフェ小春日和』(*)。長野市、旧豊野

町の市街地の一角、かつてこの場所には『春日時計店』という一軒の時計屋さんが建っていました。まだ機械式の時計が当たり前だった頃、店内では修理に訪れた地元の障がい者施設で暮らす方々が畳に上がりお茶をいただく姿も見られました。

時は流れ、時計店のご夫婦も高齢となり店をたたむ時を迎えました。その際、時計店から地元の障がい者施設へ申し出がありました。地域との関係を大切にする施設にこの場所を使ってほしい、と。そうした想いがつながり、時計店は障がい者の就労を支援するカフェへと生まれ変わりました。



今では心やすまる居場所として地域に根づく『かまどカフェ小春日和』。お店の案内にはこのように書かれていました。

「小春日和」は利用者・地域の方々にとって、柔らかな光が降り注ぐ穏やかなひだまりのような場所になることを目指して命名いたしました。「小春日和」は多くの皆様の心休まる場所として、新たな時を刻んでいきたいと思っています。どうぞお気軽にお立ち寄りください。

『かまどカフェ小春日和』のネーミングには奇遇にもかつての時計店の名前が入っています。窓の外の雪解けを待つ空を眺めながら名物の“かまどプリン”をいただきました。時計の修理を待つあいだの楽しいおしゃべりが聞こえてくるような小春日和の午後でした。

(*)かまどカフェ小春日和：昭和37年に社会福祉法人長野県社会福祉事業団が長野県内初の知的障がい者の入所施設として旧豊野町に設置した水内荘のグループ施設として平成24年4月に開設した障がい者就労移行支援事業所「小春日和」のカフェ。

二毛作かわら版はホームページでもご覧いただけます

<http://www.nicesenior.or.jp>

(編集・発行) 公益財団法人 長野県長寿社会開発センター
〒380-0928 長野市若里七丁目1番7号 長野県社会福祉総合センター5F
TEL 026-226-3741 / FAX 026-226-8327